

令和4年度境港市総合教育会議
会議録

令和4年11月24日

令和4年度境港市総合教育会議

1. 日 時 令和4年11月24日（木） 開会 14時
閉会 15時30分

2. 場 所 市役所第3会議室

3. 出席者

<市 長> 境 港 市 長 伊達憲太郎

<教育委員会> 教 育 長 山本 淳一
職務代理者 中田 耕治
委 員 十河 淳
委 員 渡邊不二子
委 員 大部 由美

<事 務 局> 総務部
総務課長 石倉 俊一
総務課行政係長 深町 仁美
教育委員会事務局
教育委員会事務局長 松原 隆
教育総務課長 角 純也
生涯学習課長 松本 昭児
教育総務課長補佐兼指導係長 柳樂 力人
教育総務課長補佐兼学事係長 角本 豪
教育総務課長補佐兼管理係長 足立 統(書記)

<傍 聴 者 数> 田口俊介

4. 会議の概要

- (1) 開会
- (2) 市長あいさつ
- (3) 協議・調整事項
特別支援教育の現状と課題について
地域学校協働推進事業について

角課長 定刻となりましたので、ただ今より令和4年度境港市総合教育会議を始めます。はじめに伊達市長よりご挨拶申し上げます。

※伊達市長より挨拶

角課長 ありがとうございます。それでは議事に入りたいと思います。議事進行は市長にお願いしたいと思います。伊達市長、よろしく申し上げます。

伊達市長 そういたしますと、本日の協議・調整事項に入りたいと思います。まずは「特別支援教育の現状と課題について」、事務局から説明をお願いします。

※松原局長より資料に基づき説明

山本教育長 市議会からも養護学校についてどのように考えているのかというご意見をいただいておりますので、今後の特別支援教育の県の方向性と養護学校、特別支援学校の考え方について確認させていただきました。鳥取県は仮称ですが特別支援教育の推進計画を令和5年からスタートさせるべく、現在案を練っており、令和5年から令和9年までの5年間の計画として、一人一人のニーズにあった学びの場を創設したいという考えを持っているということでした。具体的な取り組みとしては、中長期の整備計画を策定することと居住圏域で教育を受けることができるようにすべての障がい種を対象とした総合支援型の学校施設や分校及び分教室の設置について、今後検討していくというお話でした。今までは養護学校の設置については難しいという考えだったのですが、総合支援型というのは障がい種にとらわれないということと理解して良いということでした。いろいろな県でそういう取り組みをしているところもありますので、そういったところを研究して今後活かしたいということでした。また、分教室についても子どもの数が減って空き教室が増えてきますので、特別支援教育を受けるべき子どもたち、そこで学ぶことで伸びる可能性がある子どもたちについては、通常学校の空き教室を活用していただくようお願いさせていただきました。

伊達市長 ただいま事務局から説明と報告がありました。初めに確認さ

せてください。本市の状況について、障がい児者プランでも状況は同じなのですが、知的障がいの数は横ばいで自閉症・情緒障がいが増えてきているのは何か理由があるのでしょうか。

山本教育長

本市だけでなく全国でも同じ状況です。以前は知的と自閉・情緒は同じくらいの数だったのですが、今は完全に自閉・情緒の数を超えております。一つは社会的な認知ができてきて、昔は広汎性の発達障がいという言い方でなんとなく自閉症に似たような人たちということから、自閉症スペクトラム症という言い方に明確になって、医師の診断もつきやすくなりました。それによりサポートすると伸びる子だということがわかってきて、個別な支援を求める親御さんやニーズがたくさん出てきました。そのニーズに対してサポートしていくという体制に特別支援教育は変わりましたので、数が増えているのではないかと思います。この傾向は続くだろうと思います。

伊達市長

サポートして良くなっているのですか。

山本教育長

明確には定めておりませんが小学校の時の最初のつまずきやこだわりが強いお子さんはそういう学級からスタートされても良いだろうと、その代わり中学校に行くような社会に出る前の中等教育になった場合には、通常の中でみんなと合わせていくという力も必要になってくるので、境港市では小学校6年生で退級することを目指しております。

伊達市長

平成27年度から特別支援コーディネーターを配置して、幼稚園、保育園の時から様子を観察し、しっかりその子の状況を把握できているということもあるのですかね。

山本教育長

これは大きいと思います。子育ての方で作っている「すくすく」というカルテの中で1歳半、3歳、5歳児健康診断の3回に分けて、気になるにことに対して発達相談の場を設けており、学校側のアプローチとしては、就学時健診の時にも教育相談の場を設けておりますので、心配事があれば相談に乗れますという体制ができており、市長が言われる「子育てするなら境港」のベースを実行できているポイントかなと思います。数が増えることは問題ではなくて、サポートしていく体制とこれらの人員を確保していく

ことが今問題になってきつつあります。

伊達市長 小学校のサポート体制の人員は足りていますか。

山本教育長 市の特別な施策であります指導補助員により、通常の中にいる気になる子のサポートや自尊感情を失わないサポートができていますので、気になる子は支援学級に入らないといけないということではなく、多様な選択を選びながらサポートする体制をいろいろな角度から構築しているというのが今の状況です。これが公的に国や県のサポートになっていくことが、子どもの幸せにつながりますので国県要望としてあげさせてもらっていますし、国もそういうニーズが必要だということは気づき始めていると思います

伊達市長 特別支援コーディネーターと各校2名配置している指導補助員は一般財源なので苦しいところではありますが、特別支援コーディネーターについては、本当はもう一人必要じゃないかというところを教育長と話しており、しっかり国の方で財源を確保していただくよう毎年要望していきたいと思います。米子市も小1サポーターというような名前で国県要望にあげておられ、サポートする人員が必要であるという趣旨で財源を要望されております。

渡邊委員 教育長が言われた5歳児健診についてですが、小さい町村は全員が受けておりますので、そこでいろいろなサポートや支援が受けやすいということがあると思いますが、その辺りはどうですか。

伊達市長 境港は産まれたときから、助産師の赤ちゃん訪問に始まり、時期時期で必ず訪問して様子をうかがうような体制をとっており、状況を把握して早めの対応をとっておりますので、大丈夫だと思います。

渡邊委員 5歳児健診は任意ですよ。

山本教育長 健康診断になりますので、希望があればドクターとも話ができますという説明をしております。「こういう機会がありますので、相談されてみたらいかがですか」ということを保育園等から保護者にご案内して、子どもの発達だけでなく、保護者支援についても必要などところを見つけていくという形でとても良い仕組みにな

っております。そういう点では3万という人口は顔が見える範囲でちょうど良いと思っております。

渡邊委員

早い段階で支援できるということはお子さんにとっても家族にとっても良いことだと思いますので、よろしくをお願いします。

伊達市長

陽なたも、保育園、幼稚園を回って助言や指導をしていただいておりますので、早い段階でしっかりと子どもや親の状況を把握して取り組むことができていると思います。

中田委員

支援が必要な家庭については周囲の理解も必要になってくると思います。当事者に対してはこういった支援がありますよということが言えると思いますが、周囲に対して、少し前までは隠したいような風潮がありましたので、そういったことをオープンにして自然に支援ができるような街になることも考えていく必要があると思います。

伊達市長

地域共生社会づくりということに本市も取り組んでおり、そうやってお互いを理解して尊重し合うような社会が一番だと思いますが、市民の方も障がいに関する理解が変わってきているのかなと思います。作業所や放課後デイ等も増えておりますし、障がいをお持ちの家庭もオープンになってきてはいると思います。その辺りが進んでいくと気軽に相談等もできるようになってくると思います。市民の方からは、学校が放課後デイ等についてよく理解していないという指摘も出ています。その辺りの状況はどうなっていますか。

角課長

福祉課、子育て支援課と協力して、放課後デイや就学支援等についてまとめた冊子を作成するよう動いており、12月中に完成予定です。

中田委員

100人が理解して、良いと言っている心無い1人の発言で台無しになることがありますので、その辺りが心配なところですね。

伊達市長

子どもたちはどのような感じですか。気にしたりしますか。

松原局長

特別支援学級の子どもたちを学校で大切にしていけるような学校経営、理念を各校とも持っており、子どもたちの交流もしっかり行っておりますので、その辺りの理解については進んでいると感じております。

大部委員

サッカースクールの中でもそういったお子さんと接することがあるのですが、親御さんからそういった情報が入ってこないことが多くて、普通に接するのですが、当然叱るべきところは叱らないといけませんので、そうなると少し圧が強いととられてしまいます。そこは少し配慮が必要であるということを周囲が知っていないといけないのですが、今後、部活動の外部指導だったり、市民の方が先生役だったりで学校に入る機会が増えてくると、そういった知識が必要になってくると思います。その子を特別扱いするのではなく、全体を見た中で配慮が必要であるということに気づいて対応する必要があると思います。私は教育委員になって、学校の様子がわかるようになってきたのですが、一市民としては知らないことが多いので、これからは多様性の中でもっとオープンにして、ジェンダーにしてもそうですが、これがきっかけになって当たり前になってくると良いと思います。人の成長の部分では叱るべきところは叱るといった対応もしなければいけないと思います。

渡邊委員

障がいというのを一つの個性ととらえる考え方があって、一人一人の良さと課題や検討性について関わる人みんなが知らないとなかなか全体の成長につながらないので、これからコミュニティで学校はいろいろな方とつながって、外部の方も入ってきますので、教職員も勉強していかないといけなくなってくると思います。

大部委員

以前、サッカー指導の際に親子で一緒にやるということがあったのですが、10組ある中の2組の距離がすごく遠くて、「自分の子だよ」とびっくりしたことがあります。そういう子たちは「抱っこして」とこっちに来るので、寂しい気分になりました。やはり幼児教育はすごく大事なと感じます。保育園で小さい頃から預かっていますが、11時間預けることが良いのか、事情があると思いますが、その辺りの制度がうまく使われているのか、家族が離れるような制度だとそれは違うと思いますし、それが本当に子育て支援なのかなと、親支援だと思ったりもします。

伊達市長

子育ての方では親子関係づくりにもしっかり取り組んでいるのですが、言われるようにそういうところがしっかりしていないといけませんね。

十河委員

保健師さんの力はすごく大きいと感じていて、保護者も初めてのお子さんの場合どうして良いかわからない部分も多くて、子どもと接する距離感がわからないということもあると思います。この前、保護者のニーズに応じて新しく作った余子小学校の難聴教室を拝見させていただいたのですが、すごく利発なお子さんでその子の成長のために市がバックアップしてくださっているとすごく感じました。これからも一人一人のニーズに応じて、誰一人取りこぼさないという形で、教育するなら境港、子育てするなら境港と進めてもらいたいなと思いますし、手厚い支援をお願いしたいと思います。

中田委員

親が親になるためにどうしたら良いのか、根本的なところなのですが、保健師さんがいろいろ手厚い支援をしてくださるとは言っても難しい部分は多いと思います。最初から親という人はいないので、子どもの成長とともに親になってくる、親っぽくさしてもらっているというところだと思います。子どもの数も減って親同士の付き合いも減っている、核家族化で家族から教えてもらうこともできない、四角四面で文書に表すことも難しい。それぞれがそれぞれの立場でできることを一生懸命にやって、理解してもらおうということはとても良いことだと思いますが、子どもを安心して育てていくためにそれが広がっていくかと考えると斜に構えた見方になってしまいますが、難しい部分があるかなと思います。人間関係が大事になってくるとは思います。話をすればコミュニケーションがとれるというわけではなく、信頼関係を構築した上でないと難しい。そこができるといろいろ受け入れてもらえるようになってきます。漠然としています。信頼関係のある街になると良いなと思います。

大部委員

そもそも特別支援学級という言葉に親御さんは抵抗を感じていて、なぜ特別に支援なのというところだと思います。ほかに抵抗感がない名前、うちの子は支援されているのだというのがあると、言いたくない、隠したいという思いになってしまうのだと思います。特別が良いスペシャルになっていけば良いのですが、マイナ

ス面を感じてしまい肩身が狭くなってしまっているのかなという感じがします。

渡邊委員

学校の中では特別支援学級という言葉は言ってなくて、菜の花学級等と言ったりしますよね。

大部委員

菜の花学級と言っても世間では通じないで、そこが進むともう少し多様性になると思うのですが、日本は多分遅れているのだと思います。

山本教育長

名前の変遷は特殊学級から始まって、障がい児学級、特別支援学級と変わってきたのですが、その前には担任の先生の名前をとって山本学級とかいうのもありました。しらすとか、はばたきとか、かがやきという形で君の学級は校歌に謳ってあるので誇りに思っただけというのを伝えていました。そもそも分けることに課題があるのではないかという考えがあって、それは日本の教育のスピードを保つために分けたのではないかということが今検証されております。障がいの子を排除することで教育のスピードを上げる、能率を上げることが優先された時代から、共存と共栄の時代になって、なぜ分離教育を進めるのかという思考も出てきております。何度も繰り返すように特殊教育の時は特別な場で教育を施すという言い方でした。特別支援教育に2006年に変わってからは子ども一人一人のニーズに合わせた教育をするという言い方になり、それが今は個別最適という時代になってすべての子どもに必要なという言い方になって、令和の日本型学校教育のあり方の推進についてという答申の中では明らかに特別支援教育の過去からやっていたものが具現化されて、すべての子どもにやろうということになっています。中田委員が心配されるように理解されることについては本当に時間がかかるだろうと思います。差別や偏見は奥深くに潜んでいて消えたわけではありません。理解をするというのは健常側の考えで、一緒に暮らす、一緒に生活する、一緒に学ぶのに人が足りなければサポートが必要になる。サポーターがいればうまく社会が回る、チームが回る、そういう環境を大人が用意する必要があります。子どもが排除されないように、それに伴って親も子どもが迷惑をかけてすみませんと小さくならざるを得ないのですが、そういった社会を少しずつ減らしていく必要があります。例えば12月10日にふれあいフェステ

イバルがありますが、人権の立場からそういうことを考える機会になります。その中ではまつぼっくりの子が元気よく太鼓を叩いている姿も見られます。理解しろ、理解しろと言うだけでは進みませんので、祭りに来てみて良かった、頑張っているということを思ってもらえるようにいろいろ工夫をしていくことも必要だと思います。学校教育ももちろんですが。

伊達市長

それでは「特別支援教育の現状と課題について」は以上とします。続いて「地域学校協働推進事業について」に入ります。初めに中田委員と十河委員が長崎で行われた研修会に参加されたと伺っておりますので、説明をいただいてから議論に入りたいと思います。

中田委員、十河委員より長崎の研修会について説明

伊達市長

それでは先ほどの説明についてご質問ありますでしょうか。

渡邊委員

小さい地域だと顔が見えるのでやりやすいところはあると思います。「あそこは誰々が住んでいる」、「あそこのおばあちゃんには病気になるので助けてあげないといけない」という感じで日頃の生活の中でつながっているところは非常にやりやすいと思いますが、大きいところだと「あそこには誰が住んでいるのか」という感じでなかなか難しい部分もあるのかなと思います。

伊達市長

対策ではなく思想を創る、他人事ではなく、自分事が重要とありますが、中田委員が言われたようにどこに行っても自助、自分の身を守ることができるということは大事だと思います。

中田委員

話を聞いていて地域と学校がつながる、つながりたいと思っていて模索しているなという部分を感じました。実際、我々もCSに関わらせてもらいながらどうしたものだろうかというところもあるのですが、持っているところの特徴を活かしていくしかないということを改めて思いました。境港も3校区で動き始めて、良い方向で動いているなということは再確認できた気がします。

伊達市長

中浜は学校で防災士さんが子どもたちに教えて、地域連携で公民館だったり、各種団体協議会だったり、みんなで取り組んでお

られましたが、まずは学校できちんと子どもたちが学ぶことが大事だという認識でされており、良かったですね。

中田委員 大きな成功体験ができていますので、そういったことは熱いうちにつなげてもらいたいです。

伊達市長 家族防災会議の日を制定しましたが、家庭でもしっかり話をしてもらいたいですね。

中田委員 事前から考えているといざその時になってパッと思い浮かぶので、前もって考えるということは大事だと思います。

伊達市長 CSの進捗状況は委員には逐次報告されておりますか。3つの校区で具体的にどういったことをしているのか伝わりにくいと思いますが。

柳楽補佐 事務局とコーディネーターで定例会をずっと持っていて、そこで情報を共有しながら必要に応じて発信するという形にしております。

渡邊委員 コーディネーターさんが作成された通信が回覧で回ってきています。

伊達市長 公民館報にも記載してありますか。住民の方も情報が伝わってこないと自分も手伝うという気にならないと思いますので。余子の例だと、夏休みの最後に地域の方にも声をかけて、小学校の除草作業をしておりますが、保護者でない方もたくさん参加されております。難しいことはできないが、草刈くらいなら手伝えるといった感じで、学校に行って何か手伝うという機運が高まってくると良いですが。

十河委員 中学校区にそれぞれ学校運営協議会が設置されて、いろいろな方を巻き込んでいく動きというのできてきております。私は三中校区で関わらせていただいておりますが、公民館祭りでも中学生にブースを持たせて、何がしたいか企画させて、大人は見守るというスタンスでさせたところ、三年生のチームが外江公民館で、一年生のチームが渡公民館で頭から湯気を出しながら、知恵を出

しながら、自分たちでどうしたら良いか考えてやってもらったのですが、中学生は意外とそういった力を持っていて、大人が少し手助けしてあげるとこんなこともできるのだと、彼ら彼女らも自分たちがやったことに対して自信が持てるようになります。いろいろな方が見てくださるので、地区の方もおもしろいことをやっているなどという形でどんどん関わるようになってくださり、活動が広がっていくと負担感がないような形で地域の中でも良いサイクルができてくると思います。地域の方が子どもたちを見守る、地域が盛り上がっていく良いきっかけづくりにCSがなっていて、今回長崎に行かせていただいて、境港市は良い方向に進んでいると改めて思いましたので、これがどんどん進んでいけば良いと感じます。

山本教育長

結果はあまり求めない、貴重な経験をさせてもらえるので、大人と子どもが同じテーブルで同じ協議をすることが大事で、どの方向に流れても良いと思います。町々の温度差や構成メンバーで形は違うと思いますが、重荷になるようなことはする必要はない、子どもたちを主役にしようとする、キーワードは熟議になると思います。熟議を起こしていくことがそれぞれ必要になります。それぞれの思いや悩み、考え方をすり合わせていく、答えのないすり合わせをじゃあやってみようかとなると、学生であろうとおじいさんであろうと、地域の偉い人であろうとみんなで決めたことはみんなの責任になります。大人が勝手に考えて、子どもを入れて、結果うまくいかないとCSは失敗します。つぶさないようにするためには、困ったら話し合うということを繰り返すことが大事になります。

中田委員

境港はPTAが機能していますのでそこの棲み分けが課題かと、互いに遠慮しあっていて、学校側もPTAの方が距離が近いので話がしやすいところがあります。CSの方にも案内があっても、何か動きづらい雰囲気があるという感じがあります。

山本教育長

余子が今やっている草刈が地域に発信する一つのツールになっていて、「草刈くらいなら自分も参加できる」と地域の方が言うてくださる。PTAはいつか地域の人になりますので、社会教育の中の学校教育なので全く同じです。将来の地域を守る人たちをPTAの中で練習しているという棲み分けが必要で、PTAの方

からCSをやるのであればPTAはいらぬのではという意見を聞いたことがあります。一緒にやるのが大事で、その中で話もできます、一緒に子どもと汗をかくということを学校は少しずつ広げていって、その先が地域になるというところへCSは導く、地域の中にある学校だということに導く必要があります。PTAとCSもしっかり議論すれば良いと思います。みんなで思いをぶつけながら悩みを解決していくということが一番遅いやり方かもしれませんが、一番強いものになると思います。震災があった大津市もCSのツールとして話があった際は震災復興中でそれどころではないと断われたそうですが、3年後には頼むから街づくりのために来てくれという話になったそうです。学校だけ再建しても、道路を付け替えても、コミュニティが育たない。どうやって地域でそういうのを育てるかということが大事になります。境港市も焦ってはダメで今のペースが良いと思っています。余所がしていることを覗けて、良いことをやろうというムードができていますので良い方向に進んでいくと思っております。形を求めない、子どもたちにやれということをも求めない、この前の檜垣さんのようにすぐすぐには進まないと思いますが、未来の大人になる子どもたちが、そのエッセンスを吸収していけば明るいだろうなと思っております。ぜひそんなところにコンパクトシティ境港は進んでほしいと思います。

伊達市長

走りながら考えていけば良いですね。それでは、本日予定しておりました協議・調整事項は以上となります。ありがとうございました。